

ガイダンス：大学教育のためのPDCAサイクルを回そう

大学教育センター教授

舛本 直文

はじめに：大学教育の質保証が求められるわけ

今の日本の大学は、希望者は誰でも入学できるユニバーサル化の段階にあるとされ、ほぼかつての高校と同じ状況に移行しつつある。その中でも、国際化＝グローバルスタンダードに合わせ、日本式大学授業への反省や単位互換・留学などへの対応が求められている。また、文科省の法令改正により教育情報の公開が求められるようになった。これは大学の社会的責任（アカウンタビリティ）としての公開であるが、法制化することにより、実態をごまかす大学などを駆逐しようということであろう。

しかし、このような外圧による対応ではなく、大学教育の質保証では、本来的には教師・学生ともに「よりよい授業」を求め、その結果学生達に学習成果を保証することが重要なのである。つまり、これまでの「勉強しない学生たち」と「勉強させない教員たち」（主要関心事を研究に置くなどのため）の互いに楽をしようとする馴れ合い構造からの脱却が求められているのである。

FD・SD：絶えざる営み

我々のすべての営みには、計画・立案、実践、評価、反省・再計画というPDCA（Plan-Do-Check-Action）サイクルがあり、そのサイクルとともに改善・充実されていく。PLANの段階では、首都大学のミッションと学部・学科の教育目標が確認され、シラバスの作成、教材開発、評価方法・基準の確認などが行われる。DOの段階では、授業方法（発問、討論、発表）の共有、教育機器の活用、授業時間外学習課題の提示、成績評価、オフィス・アワーの実施等が含まれる。CHECKの段階では、SE・TEの実施、試験、ピアレビューや自己点検・評価、Web授業公開、授業ノート作成、ポートフォリオの作成などで授業の振り返りが行われる。Action（FB・RE-PLAN）の段階では、学生支援・教員支援・職員支援のシステム化に向けて、インセンティブの活用、結果のWeb化・印刷や出版（『クロスロード』やリーフレットの充実等）などによる広報も通じて公開し、新たな授業構築に向けて行動する

ことが含まれる。

このような絶えざるPDCAサイクルを回すことによって授業実践が螺旋的に改善・充実していくものと考えられている。ここでは、年間の時系列に沿って、本学のPDCAサイクルの作業を辿っておくことにする。

PLAN：10月頃～：授業設計（計画・立案）

先ず、翌年度の授業の目標・方法・評価などの基本構造を設計することから始まる。目標・テーマは学生たちに身につけさせたい能力（成果）である。それを達成するために15回の講義内容を順序立て、段階的に構成することになる。さらに、単位制度をふまえて授業時間外学習課題を設定し、そのためのテキストを選定して参考書リストを作成する。授業方法として、グループワーク、プレゼン、講義方式等を考慮し、最後に成績評価のための評価項目や評価方法、評価配分などの基準を定める。この評価は学生たちに達成させたい能力（成果アウトカムズ）を計ることができるものでなくてはならない。

11月頃にはこの授業設計をシラバスに落とし込んでいくことになる。シラバス作成の目的として、次の5つがあげられることが多い。①授業選択情報、②学修計画の指針、③学生と教員の一種の契約書的确認（レポートや評価など）、④学術的な情報、⑤授業のルールなど事務的情報である。

シラバスの作成に当たっては本学の「授業担当者のための手引き」（pp.26-29）が参考になる。シラバスの記載内容（ポイント）として、本学では以下の7項目の要素の明示が求められている。

- ・ 授業方針・テーマ（教師目線からの授業のねらい）
- ・ 到達目標（学生目線からみた獲得できる学習成果）
- ・ 授業計画・内容（15回分）
- ・ テキスト・参考書（入手できる基本文献）
- ・ 成績評価方法（絶対／相対）・評価項目（学習成果が測れる項目）・評価配分（ウェイト）、試験・レポートなど
- ・ 特記事項（受講資格、オフィスアワー、連絡など）

＜参考＞シラバスとコースカタログの違い
「コースカタログ」とは、全授業の簡単な概要であり、授業選択のために簡潔にまとめられた情報。字数制限などのフォーマットが指示される。「シラバス」は、初回の授業時に受講者に配布される受講者のための授業の詳細な学習支援情報。自由な記述で、字数制限なし。
＜夏目達也他（2010）大学教員準備講座，玉川大学出版部，p.28＞

DO：4月～授業の実施（教授法）

4月の授業開始はオリエンテーションから始まる。ここでは「大学の学びへの誘い」が重要である。本学では「都市プロ」のオリエンテーションで「45分×2回」講義を試行している。初回には、受講者のレディネスの把握や動機づけが行われ、詳細版シラバスの配布も行われる。授業の情報や授業時間外学習のためにWebの活用や毎回のPPT資料の活用などが試みられている。

受講者名簿である「教育手帳」は履修申請者の確認や出席管理に活用できる。Webからダウンロードも可能であり、手作りでカスタマイズして利用する方法もある。

DO：5月～ルーティンワーク

5月の連休明けから授業が落ち着き、毎回の授業の準備として、PPT作成、配付資料の準備やWeb公開、ミニッツペーパー（毎時の小レポート）整理、出席管理、授業時間外学習課題の採点等のワークが定常化する。以上の作業にTAが活用できると随分助かる。「基礎ゼミ」や「情報教育」ではTAが準備されているが、「都市プロ」では大人数の授業しかTAが配備されない。

授業担当者としては自分なりの授業ノートを作成し、毎授業のポイントや反省等を整理しておくことと次年度の授業に役立つ。また中途に中間試験を取り入れ、形成的評価をして理解度を把握したり動機づけしたりして受講生にFBすることも重要である。毎回の授業資料やノートなどからティーチング・ポートフォリオ（TPF）を作成していくことも有益であろう。

DO：7月～成績評価（評価計画）

7月の授業後半になると成績評価の準備に入る。既にシラバスで学生に周知しているはずであるが、以下のような評価計画を再確認しておく必要がある。

・評価方針：形成的評価／総括的評価

- ・評価方式：絶対的評価／相対的評価
 - ・評価方法：レポート・中間試験・期末試験・口述・プレゼン・GW・製作・実演か
 - ・評価項目（対象）：出席、ミニレポート、授業中の発言、課題、テスト（理解、論理、問題発見、独自性等）
 - ・評価配分：%配分、ウェイト
 - ・評価結果のFB：返却のためのオフィス・アワー等
- このような事項をすべてシラバスに記載しておくことが難しい場合には詳細版シラバスを配布する方法もある。参考までに、本学の全学共通科目には成績評価に関する「申し合わせ」等が以下のように定められている。基礎ゼミ：ガイドライン、情報：指針、都市プロ：申し合わせ、未修言語：基準、保健体育：基準である。残念ながら、実践英語と理工系共通については定められていると推察するが公開されてはいないようである。

DO：7月～成績評価

実際の成績評価として、中間テストによる理解度や学習進捗の確認とFB、形成的評価としてのミニッツペーパーや授業ノート、ラーニング・ポート・フォリオ（LPF）や出席状況がある。総括的評価としてのレポートには、客観的評価を心がけるために教師も評価する能力を身につけなくてはならない。期末試験として、論述、選択マーク、口述、プレゼン、作品、ポスター製作などが考えられる。それぞれの評価基準が受講生には公開されていなくてはならない。またこの評価は、シラバスに掲げられた学習成果と対応している必要がある。また、クラスの評点が「5」や「2」などに偏る場合には、課題に偏りがある可能性もあるので、自己評価が重要になる。

続いて、採点結果の報告である。マークシートの紙ベースとWeb入力の方法がある。転記ミスや時間短縮の視点からWeb入力の利点が多いようであるが、情報管理の点を注意しなくてはならない。成績評価の分布の偏りはGPAにも関わってくるので注意が必要である。最後に、学生へのFBと質問などへの対応が求められる。

さらに言えば、成績情報の管理が求められる。学生の質問やクレームに対応できるように出席や試験成績などの情報を整理して4年間は保管しておく必要がある。本学の全学共通科目では、最低1年間は成績情報を保管するよう要請されている。

CHECK：7月～様々な評価

PDCAサイクルのCとは授業のチェックとしての様々な評価である。例えば、学生の授業評価アンケート（SE）、教員自身の授業評価アンケート（TE）、9月末のSE・TEの集計結果の返却、自分自身の授業ノート、中間・期末試験の傾向、レポートの成果、TAによる反省評価、同僚による評価、FDレポート・リーフレットの活用、自己評価としてのTPF化などが考えられる。

ACTION：8, 9月～ 授業の再構築

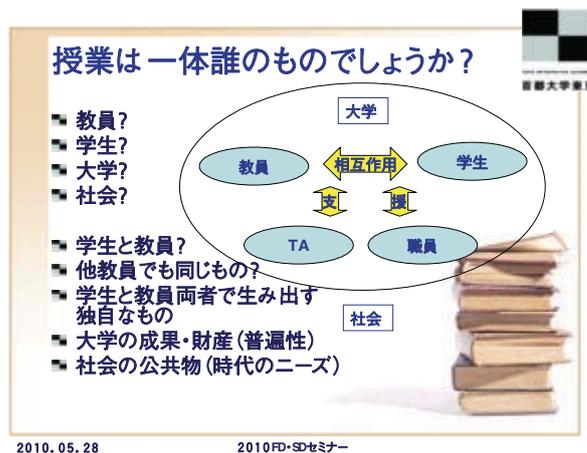
チェックの後は授業の再構築へと改善していくことになる。これがACTIONである。さらに授業方法や評価方法などの研修や情報収集も有効になる。

ここでは、次の授業に向けて授業の再設計情報の確認から始まる。様々な評価、テストやレポートなどCheck情報を活用すること、様々な研修への参加（FDセミナー等）だけでなく、日常的に同僚と話し合うことも一つのFDである。他大学・機関の情報を得ることも有益であろう。出版やWeb公開情報の利用、さらには自分の研究に係る最新情報を導入していくことも重要である。

最後に：授業は一体誰のものでしょうか？

さて、最後にこのような問いを投げかけてみたいと思います。自明な問いとしてあまり振り返られない問いかもしれません。しかし、さまざまな回答が可能なかもしれません。教員のもの？ 学生のもの？ 大学のもの？ 社会のもの？ 学生と教員両方のもの？ これらを図に表してみました。

さらに、授業は他の教員でも同じものであるべきなのでしょうか？ 確かに、誰が教えても同じ成果が達成されることも重要かもしれませんが。個人的な意見ですが、「授業は学生と教員両方で生み出す独自のものがある」と考えます。授業も個性ある生きたもので、教員と学生にその場しかない化学反応を引き起こすようなものであることを理想とするのではないのでしょうか。しかし、授業は大学の成果・財産として普遍性を持つべきであるという考え、社会の公共物として、時代のニーズに合致しているべきだという考えもあるでしょう。しかし、教員が勝手に教えればすむものではないと思います。



最後に、本セミナーでは「PDCAサイクルには余裕がない。遊びが重要では？」という意見が出されました。当然のご意見ですね。学生も教員も楽しみながら授業から脱線もしながら、化学反応していくのですから。

参考：授業改善のための参考文献等

- ・夏目達也他（2010）「大学教員準備講座」玉川大学出版
- ・「成長するチップス先生」名古屋大学Web版：
<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/tips/>
- ・中井俊樹（編）（2008）英語で授業シリーズ(1) 大学教員のための教室英語表現300. アルク
- ・『まんがFDハンドブック おしえて！FDマン』京都FD開発推進センター：Web版
http://www.kyoto-fd.jp/handbook/digital_book/index.html
- ・首都大学東京FD委員会Website：
<http://www.comp.tmu.ac.jp/FD/>

付録：FDとはFaculty Developmentの略ですが、異説：

- ・Food & Drink? (一杯飲みながらの日常的改善?)
 - ・FriendlyなDiscussion? (日常的FDを和やかに?)
- (様々な異説が考えられそうです)